

## 研究授業「教育心理学」の実施

中 村 多 見\*

### Enforcement and reflection of an open class “The educational psychology”

Tami Nakamura

(Abstract)

This paper is record of an open class performed in the Department of Early Children Education of Takamatsu Junior College. This class is performed by educational psychology. The content of this class is “extrinsic motivation and intrinsic motivation”. The aim of this class is to understand the reason why we act (including learning and the memory) from the general outline of motivation. Moreover, it is the aim of this class to understand how to give rewards affect the qualitative change of extrinsic motivation and intrinsic motivation.

Key words : open class, educational psychology, motivation

#### 1. 研究授業および検討会の日程

○研究授業

日時：2012年11月8日（木）4校時 14時40分～16時10分

場所：2101講義室（2号館1階）

授業科目：教育心理学（担当：中村多見）

○検討会

日時：2012年11月8日（木）5校時 16時20分～17時50分

場所：2104図工室2（2号館1階）

---

\* 提出年月日2013年11月30日、高松短期大学保育学科准教授

## 2. 本講義「教育心理学」の紹介

乳幼児期の子どもたちは遊びのなかで、できることを少しずつ増やして、自らの自由や可能性を大いに広げていく。そんな子どもたちの主体性を存分に引き出し、豊かな知性や人間性を育むための知識や技術が保育者には必要である。したがって、本講義を通して、「子どもの知的発達や学びのしくみについて理解し、「子どもが生き生きと主体的に学ぶことを支える」保育者になることを目指していく。

## 3. 本講義「教育心理学」の受講生

教育心理学は、幼稚園教諭二種免許状取得のための必修科目、かつ卒業必修科目として位置づけられているため、毎年全員の保育学科生が受講している。平成24年度後期の受講生は、保育学科1年生63名と2年生1名であった。そのほとんどが保育職を目指す学生で、子どもや保育・幼児教育についての関心は非常に高い。また、前期授業で得た子ども理解と、後期から始まる観察参加実習のおかげで、より一層身近に感じられる授業内容に熱心に取り組む学生は多い。そのため、授業への欠席・遅刻はほぼなく、私語のない静穏な授業環境を保つことができている。

## 4. 「教育心理学」の講義内容と学生の理解

回 (日付)	講義内容	学生の理解
第1回 (9/27)	オリエンテーション	教育心理学を学ぶ理由を考え、理解する。また、半期の授業計画と受講上の注意を知る。
第2回 (10/4)	教育と発達	効果的な教育のために必要な子どもの発達を理解し、個に応じた教育の実現を目指す。
第3回 (10/11)	知能と学力・学習の原理①	知能の概要と学力との関係性について知り、人間の学習のしくみを理解する。
第4回 (10/18)	学習の原理②・教授-学習過程	人間の学習のしくみについての理解から、それに合う教授法を知る。
第5・6回 (10/25)	記憶の成り立ち	人間の記憶のしくみについて理解し、学習の成果を確かなものにするための工夫を知る。
* 第7回 (11/8)	意欲と動機づけ①	人間が行動する原動力になっている動機づけについて理解する。
第8回 (11/15)	意欲と動機づけ②	子どもが主体的に学ぼうと動機づける方法ややる気を高める働きかけと環境構成を知る。
第9・10回 (11/29)	教育評価 教育測定と統計	教育評価の意義を知り、それに適した方法で測定・分析・評価することを理解する。

第11回 (12/6)	パーソナリティと適応	個に応じた教育を実現させるための適性処遇交互作用について理解する。
第12回 (12/13)	これからの特別支援教育	特別支援教育の概要と保育者に求められる障害理解の必要性について理解する。
第13回 (12/20)	発達障害を持つ子どもの理解と対応	発達障害の概要を理解し、適切な保育対応について知る。
第14回 (1/10)	教育相談の進め方	さまざまな教育／保育相談に応じるためのカウンセリングマインドとテクニックを知る。
第15回 (1/24)	授業のまとめ	.....

\* 本時

## 5. 教材とその工夫

教材：テキスト、レジュメ（A3両面、右面はノート仕様）、

出席確認票（確認テスト付：毎時採点して返却し、前時と本時のつながりを明確にするために使用）

工夫：レジュメはテキストの要点と補助（図表等）を基本文章でまとめ、主要な箇所は穴埋めにして目立つようにしている。読解力を高め、漢字学習に役立てばと工夫している。また、レジュメが板書代わりになっているため、右面のノートは学生主体で質疑応答や追加内容、復習、試験対策等に活用できるようにしている。

## 6. 研究授業の指導案

これまでの教育心理学で、学生は「学習」や「記憶」といった子どもの知的発達と学びのしくみについて授業を受けてきた。その「学習」や「記憶」を含む人間のあらゆる行動がなぜ引き起こされるのかについて考えるのが本講義のテーマ「意欲と動機づけ」である。前半（①）の本講義では、動機づけの定義と種類について詳しく説明し、人間が行動する理由について理解することが第一のねらいである。第二のねらいは、報酬の与え方が動機づけの質的变化に大きくかかわっていることを知り、次週後半（②）の「動機づけと教育－やる気を高める工夫－」につなげていく予定になっている。

時間	内容	目標と留意点
～14:40	・教材準備, 座席表の提示, その他	・3校時の片づけを手早く済ませる
14:40	・レジュメ配布 ・前時確認テストの返却  ○挨拶 ○前時確認テストのチェック	・最前列に準備された配布物が全員に行き渡ったかを確認する ・授業の始まりを意識する ・確認テストの模範回答から前時の復習を行い、誤解を正し、より良い理解を深める ・本時とのつながりを意識する
14:55	○意欲と動機づけ ・動機づけの定義 ・Let's Challengeへの回答・聞き取り ・【補足】動機づけの源－欲求と情動 ・(2度目) Let's Challengeへの回答・聞き取り  ・動機づけの種類 ・Let's Challengeへの回答・聞き取り	・前時までの学習と記憶だけでなく、人間のあらゆる行動に目を向ける ・人間が行動する理由について、動機づけの定義だけでなく、その源泉にあたる欲求・情動についても発心Iを振り返って確認する ・マズローの欲求階層理論から、教育が人間の自己実現を支えるために、平和であることがいかに重要かも知る(できれば感謝もしてほしい) ・! Let's Challenge! への回答から、人間が行動する理由が様々であることを実感し、それが種類に分かれることを知る ・両動機づけの特徴を把握し、教育や学習において望ましいのはどちらかを理解する ・報酬の与え方が動機づけの質的变化に大きくかかわっていることを知り
15:30	・両動機づけの関係	
15:55	○まとめ	・授業内容の概略を図示し、その理解度を確認テストでチェックする
16:10	○出席確認票の配布, 提出 ○終了(挨拶)	・次週への期待(課題)を持たせ、出席を促す

## 7. 授業を終えての自己省察

今回、授業者にとっては2回目、6年ぶりの研究授業であった。前回に比べると、授業内容や進め方、レジュメの工夫について、検討会で“落ち着きのある丁寧な授業”“学生傾向に熟慮された授業”と評価された。研究授業に臨むときの緊張は前回と変わりなかったが、それでも学生の様子を確認しながら授業を進め、話すテンポや順序、言葉遣いに配慮できるようになっていたことは自分なりの発見でもあった。今後も、授業の精度を上げ、学生にとって分かりやすく残りやすい、そして将来必ず役立つ授業を展開できるよう精進すべきと覚悟を新たにした。

以下に、研究授業後に行われた検討会で指摘を受けた事項について自己省察する。

### (1) 板書をしない授業スタイルについて

この授業スタイルは、授業者が授業をするようになって3、4年目くらいから取り入れられた。初期は板書もしていたが、どうしても板書に多くの時間を要し、学生との対話がままならない事態に直面したため、心理学という「いかに自身の経験と重ねることができるか」を実現させるための時間の効率化を図るためというのが第一の理由である。また、板書を書き写すことができない（筆記用具やノートを持って来てなかったり、そういう習慣がない等）学生にも対応しなければならなかったことも第二の理由に挙げられる。

時間の効率化や学生対応の結果ではあるが、授業内容をできるだけしっかりと学生に理解してもらいたいという目的は明確に、学生に分かりやすく思い出しやすいレジュメを作成して配布することで、毎度大量の板書をせずに、学生との自由で双方向的な対話を重ねながら授業を進めることができている。

なお、現在のレジュメのスタイルは前回の研究授業時に“穴埋めだけでは安易すぎるのでは”という指摘から発展させたものである。右面をノート仕様にすることで、学生が自由にメモしたり、質問への回答欄に使ったり、復習や試験勉強時のまとめの場にしたり活用できるように工夫してきたものである。

### (2) 学生の理解度の確認について

毎度、授業を進めながら学生の様子を確認し、時には質問や対話を交えながら、授業の理解度を確認している。また、授業終わりの出席確認を兼ねた確認テストでも、学生の解答内容・状況から理解度を確認し、次回授業初めに模範解答と共に、間違いの指摘とその解説、理解の仕方等は丁寧に説明するよう心がけている。前回の研究授業時にも、出席確認を兼ねた用紙を配布していたが、当時は単なる授業への感想や質問・意見を書かせるだけであった。その内容も理解度を確認することに役立ってはいたが、それを含め、こちらがねらいとして定めた授業内容をしっかり理解しているかどうかを確認するためにテスト形式を採用したことは有益であった。現在も裏面に感想や質問・意見を書く欄はそのままに、学生が書きたいときに自由に書いてもらったり、こちらが聞き取りたいことがあれば質問し回答してもらっている。

ただし、多人数のために、その確認の正確さや確実さは保証しきれない。できるだけ努めているが、抜け落ちがあることもまた自覚している。今後、こういった理解度を確認する術があるか模索しつづけることはもちろん、検討会でも提案のあった復習課題等の取り

入れもチャレンジしていきたいと考えている。

### (3) 観察参加実習との関連づけについて

教育心理学が一年生後期の授業になってから、授業で観察参加実習のことを引き合いに出して説明することが多くなっている。やはり幼いころの自身の経験と重ねたり、頭の中で想像するだけでなく、「今、経験していること」と関連づけて話した方が学生の反応は断然いい。そのため、意識して授業の中に取り入れているが、研究授業を経て、その程度をもっと増やした方がいいことが分かった。また、より具体的に学生に聞き取っていく方が良いことも分かった。今後の課題にはなるが、観察参加実習だけでなく、他の授業との関連づけ・連携を密にし、学生の学びを連続性ある体系的なものにすべく工夫していけたらと思う。

### (4) 幼稚園教育要領・保育所保育指針との関連づけについて

今回授業では、全く触れなかった。授業内容によっては、一年生前期の発達心理学Ⅰから始まって、教育心理学でも話題にすることはある。ただし、毎回必ずということはなく、その程度が心配になった。今後、こういった関連づけができるか、自身の読み込みに努めていこうと思う。

### 参考文献

本郷一夫編著 2007「シードブック 発達心理学 保育・教育に活かす子どもの理解」 建帛社

本郷一夫・八木成和 編著 2008「シードブック 教育心理学」 建帛社<sup>\*1</sup>

深堀元文 編著 2010「図解でわかる 心理学のすべて」 日本実業出版社

<sup>\*1</sup>本講義の使用テキスト

### 付記

最後に、研究授業にご協力頂いた学生をはじめ、多くのご意見ご指導をくださった諸先生方に心より御礼申し上げます。

\*以下は、研究授業のレジユメである。

## 第3章 意欲と動機づけ①

### 動機づけの定義

人間はなぜ行動するのか？学習し、記憶するのはどうしてか？「面白いから」「将来のために」「卒業できないと困るから」…内容はいろいろと異なるものの、すべての行動にはそれが生じる（ ）が必ず存在する。それを説明する概念が（ ）：意欲、やる気、モチベーションとも言う）であり、その定義は「人間のすべての行動を起こし、それを一定の方向へ維持していくプロセスのこと」を指す。

### !Let's Challenge! あなたはなぜ〇〇（行動）するのか？

- ① あなたは、なぜご飯を食べる？ \_\_\_\_\_
- ② あなたは、なぜ友だちと遊ぶ？ \_\_\_\_\_
- ③ あなたは、なぜ授業に来た？ \_\_\_\_\_

### 【補足】動機づけの源—欲求と情動

欲求と情動は、人間に行動を動機づける。例えば、マズローの欲求階層理論（右図）によると、人間には生理的欲求、安全の欲求、愛情と所属の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求があり、低次の欲求ほど強く、それらが満たされてはじめて、より高次の欲求を感じるができるとしている。すなわち、最高次の自己実現の欲求を感じるためには、より低次の欲求が十分に満たされた状態であることが必要になる。そして、「楽しい」「怖い」「悲しい」といった極めて本能的な心の作用である情動もまた、「笑う」「逃げる」「泣く」といった行動をかりたてている。



### 動機づけの種類

- ① **内発的動機づけ**：行動すること自体を目的として行動する動機づけ  
 自分の興味関心や好奇心に従って行動し、行動すること自体が目的になっている動機づけである。あることが楽しいから行動するとか、面白いからやるといったものである。例えば、趣味や遊びは誰かにやれと言われて仕方なくやるわけではないし、やらなければならないと思ってやっているわけでもない。そのことを自分がやりたいと思って行動し、楽しさや面白さを感じる。内発的動機づけは、自分の興味や関心に基づいているので、行動が自発的に生じる。また、他者がかかわらなくても興味のある限り行動が継続するという特徴もある。
- ② **外発的動機づけ**：報酬と罰、目標のための手段として行動する動機づけ  
 報酬と罰、他者や周りの状況など、自分以外の外的要因に働きかけられて行動するという動機づけである。やりたいからやるというものではなく、やらされるからやる、やらないといけないからやるというものである。例えば、勉強嫌いな子どもの場合、特に何もなければ勉強しないが、親や先生から叱られる（＝ ）からしぶしぶ勉強する。または、成績が上がった

ら欲しい物を買ってあげる（＝ ）という提案に乗って勉強するなど、外発的動機づけは、行動することで報酬を受けたり、罰を回避したりするための手段になっているところに特徴がある。そのため、外的要因がなくなると、行動しなくなってしまう。

**!Let's Challenge! 教育や学習において望ましい動機づけはどっち？**

答え. \_\_\_\_\_

▼ ⇒なぜだと思う？

**内発的動機づけと外発的動機づけの関係**

前述のとおり、内発的動機づけと外発的動機づけは質的に異なる特徴をもっている。教育や学習においては、「内発的動機づけこそが重要なものであり、外発的動機づけは悪である」と考えられやすい。

しかしながら、実はこの内発的動機づけと外発的動機づけはまったく独立の、もしくは対立するものではなく、（ ）をもつものであることが分かっている。つまり、2つの動機づけは互いに（ ）する関係にあり、それを生じさせるのは外的要因である（ ）の与え方が大きくかかわっているとされている。

**【内発的動機づけから外発的動機づけへの質的变化： 】**

報酬そのものや報酬をもらえるという期待が、内発的動機づけを低減させたり、外発的動機づけへと質的に変化させることがある。報酬や罰などを用いて、親や教師が子どもをコントロールしようとする、子どもの自分で自分の行動を決めようという（ ）・（ ）が損なわれ、その結果やる気を失ってしまうのである。

ただし、報酬は報酬でも（ ）は、逆に内発的動機づけを高めることが分かっており、これを（ ）と言う。「よく出来たね」「がんばったね」などの結果についての情報提供（＝フィードバック）が内発的動機づけの基盤である（ ）：有能感）を高めるためである。

**【外発的動機づけから内発的動機づけへの質的变化： 】**

アンダーマイニング現象とは逆に、無気力でほとんどやる気のなかったことや、嫌々ながらやる、やらされていたことが、いつの間にか楽しくなって自ら進んでやっていたというようなケースも実際多い。

これは、偶然にうまくいったことをまわりから褒められ承認されること（＝ ）で、「やればできる」という自信・有能感（コンピテンス）が芽生え、「自分からやってみよう」という内発的動機づけを引き出すためと考えられる。例えば、親がすすめた習い事に子どもが熱中していくことなどが挙げられる。

☆ やる気のある子どもと、ない子どもの違いは、どのような（ ）や考え方をしているかの違いであって、（ ）上の特徴や問題では決していない。

☆ 本来、人間には知的的好奇心や探究心といったやる気生まれながらに備わっている。それを周囲（親や教師）の働きかけで損なうようなことだけは避けなければならない。

